～第二次大戦中の歴史を語る遺構～

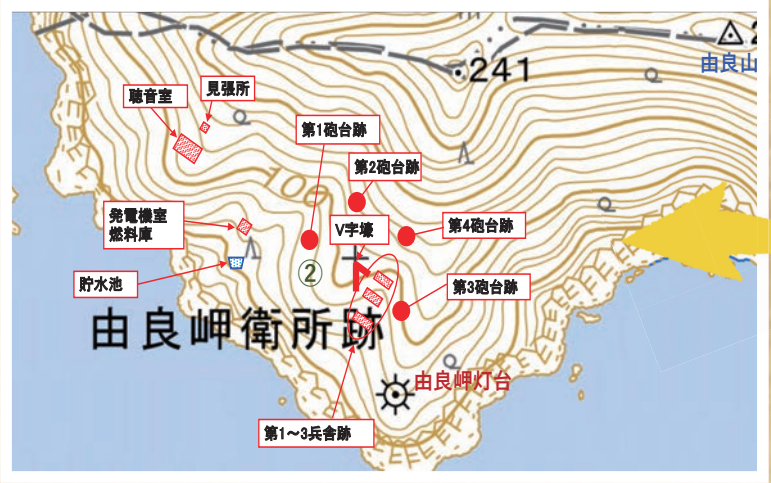
内海中学校1年生が学ぶ

潜水艦探知施設「由良埼防備衛所」

愛媛CATV動画

内海中学校1年生を対象に毎年行われている「由良衛所」の見学。総合的な学習の時間に地域学習として愛南町教育委員会生涯学習課の織田浩史課長補佐が案内役を務めています。

今年も3月4日㈮に12人の1年生が渡船に乗り込み由良半島の先端を目指しました。



【この地図は、国土地理院発行5万分の1地形図を加工したものです】

1_柏から渡船に乗り込み30分の航路を進む

2_上陸先から貯水池までは岩場や険しい道が続く

由良衛所（正式名称：由良埼防備衛所）は昭和15年頃、豊後水道に侵入する潜水艦を探知するために旧日本軍が設置した軍事施設であり、現在も聴音室や見張り所など各種の遺構が残っている。これらの施設を統括するのは大分県佐伯に司令部を置く海軍佐伯防備隊であった。

由良半島の先端に上陸した生徒たちは険しい山道を歩き、貯水池や発電機室、兵舎などを訪れた。建物の屋根上部やコンクリートの壁面には石が貼り付けられ、簡易的な石垣が作られている。これらは段々畑に偽装し、敵からの発見を防ぐために作られたもので由良衛所の特徴でもある。

衛所や砲台の建設地は、すべて集落から遠く離れた岬先端の崖上や山頂付近などであり、建設には困難を極めた。食糧や物資なども買い出し部隊が山を越え、網代地区まで調達に行っていたという。

昭和20年に入ると本土決戦に備えて施設の増設が行われ、300人もの兵士が任務に当たっていた。

3_貯水池には豪雨の影響で大量の土砂が流れ込む
4-5_貯水池から水を汲み上げるために整備されたポンプ室や発電機室。段々畑に偽装するための石垣がいまだに残る

水中聴音機12基と水中磁気探知機2基が設置されていた聴音室では、豊後水道に侵入する潜水艦のスクリュー音を24時間絶え間なく警戒していた。

敗戦までの間、一度も直接攻撃を受けたことのなかった衛所だったが、戦争終結後には砲台もろとも爆破解体された。爆破の影響で屋根や外壁が崩れ落ちているが半地下2階建ての建物は通気口や部屋数からしても、その規模の大きさが窺（うかが）える。

当時衛所で働いていた証言者はいなくなり、海風にさらされる遺構は風化の一途を辿（たど）っている。戦争を体験した貴重な証言者が減っている今、内海中学校の生徒たちのように戦争を知らない世代が、歴史を風化させないよう後世へ語り継ぐことが必要であると織田課長補佐は話す。

生徒は由良衛所について学んだ感想を、「大変な思いをしながら建物を作ったり、たくさんの人が亡くなったりする中、怖い思いをしながら戦争と向き合っていた事を織田さんの話や衛所を見て知ることができた」と述べた。

6_爆破により地上に姿を見せた聴音室/7_地面から突き出す通気口は各部屋に設置されていた/8_聴音室内部は鉄筋がむき出しになり、床にはガラスが散乱している

9-10_兵舎跡には炊事場の跡も見られ、地面には当時の物と思われる瓶が転がる
11-12_見張所の壁には迷彩柄の塗装が残る一方、土砂崩れや劣化による損傷が激しい